

# コリマ・ユカギール語における 節連鎖の統語構造について (2)<sup>\*</sup>

On the syntactic structure of the clause  
chaining construction in Kolyma Yukaghir (2)

遠藤 史  
Endo, Fubito

(承前)

## 3.2 コリマ・ユカギール語における節連鎖の統語構造

以上に概略を示した Haspelmath (1995) の従属の規準をコリマ・ユカギール語に適用し、節連鎖の統語構造を調べることにしよう。

まず、位置の観点からの規準を適用して調べてみることにする。規準 a は、例文 (15) に示されたように従属節はその上位の節の内部に現れることができ、その結果上位の節には不連続が生じる、という特徴を利用するものであった。この特徴に照らすと、ある非定形節と他の節 (非定形節あるいは定形節) との関係において、前者が後者の内部に現れることができるならば、前者は後者に従属する、すなわち従属節である可能性があるということになる。

この可能性が確認されるのは次の例文によってである：

---

\* 本論文は「コリマ・ユカギール語における節連鎖の統語構造について (1)」(『経済理論』301号所収)の後半である。セクションと例文の番号は前半から連続している。本論文は以下の補助金によって行われた研究成果の一部である：文部省科学研究費補助金 (国際学術研究)「環北太平洋の危機に瀕した原住民言語にかんする緊急調査」(課題番号 10041021), 同補助金 (基盤研究 (B-1))「北方諸言語の音声データベース作成と言語変容に関する共同研究」(課題番号 10410109), 同補助金 (特定領域研究 (A) (2))「環太平洋の『消滅に瀕した言語』にかんする緊急調査研究」, および「東シベリアの古アジア諸語にかんする緊急調査」(課題番号 12039228)。

(19) tamu-gə-lə tude masil löu-dəllə tude masil-ə

これ-位置格-具格 [3単所 コート 脱ぐ-副動詞] [3単所 コート-具格

qaŋi:no:-rəllə qon-dəllə unuŋ-ŋin peŋŋej-m

捕まえる-副動詞] [行く-副動詞 川-向格 投げる-3単

「(彼は) コートを脱いで、これ (=この魚) をコートで捕まえて、行って、川に投げ込んだ」 [NK31-7]

例文 (19) において、節連続の先頭に位置している <sup>(1)</sup>tamugələ 「これを」をその直後に来る非定形節の動詞 löudəllə 「脱いで」の目的語と考えることはできない。なぜならこの動詞の目的語はその直前に現れている名詞句 tude masil 「彼のコート」であると考えられるからである。この分析は当該名詞句の位置から見ても、名詞句と動詞の意味的關係から見ても妥当なものである。したがって、先頭に位置している名詞(句)は、日本語訳が示唆するように第2番目の非定形節の動詞 qaŋi:no:-rəllə 「捕まえて」の目的語であると解するほかに適当な解釈はないと思われる。そのような解釈をとるならば、1番目の非定形節 tude masil löudəllə 「コートを脱いで」は、2番目の非定形節の内部に現れていることになる。言い換えれば、2番目の非定形節は不連続を示す。

次の例文は、このような不連続が実際にどの程度可能なのか、話者に尋ねた結果得られたものである。ここで、各例文の (a) は不連続の生じていない例であり、一方 (b) は不連続が生じている例である。調査ではまず (a) の適格性を確かめ、次いで (a) の中の非定形節の位置を変えた (b) が受け入れられるかどうかを調べた。結果は以下の通りである：

(1) 通常この単語は tamungele (tamun 「これ」, -ge 位置格, -le 具格) という形を持つ。例文 (19) の中のような形は筆者の知る限り唯一の例であるので、これは話者の言い誤りをそのまま表記したものではないかと思われる。なお Nikolaeva (1997) の音素分析 (特に母音音素 /ə/ の取り扱い) は筆者のものとは多少異なるが、そこからの引用は原文通りである。

(20) a. Nikolaj-die moro mor-ie-t ŋko:la-ŋin kebeč  
 [ニコライ-指小 帽子 かぶる-始発-副動詞] 学校-向格 去る/3単  
 「ニコライは帽子をかぶりながら、学校に向かった」

b. Nikolaj-die ŋko:la-ŋin moro mor-ie-t kebeč  
 ニコライ-指小 学校-向格 [帽子 かぶる-始発-副動詞] 去る/3単  
 「ニコライは学校に、帽子をかぶりながら、向かった」

(21) a. met aŋje ajbi: moro-dollo taŋ paj juo  
 [1単 目 陰 かける-副動詞] その 女 見る/1単  
 「私は眼鏡をかけて、その女を見た」

b. met taŋ paj aŋje ajbi: moro-dollo juo  
 1単 その 女 [目 陰 かける-副動詞] 見る/1単  
 「私はその女を、眼鏡をかけて、見た」

(22) a. Bolo-die kel-de-ge met iʒulbe-je  
 [ボロ-指小 来る-3所-所格] 1単 疲れる-1単  
 「ボロが来たとき、私は疲れていた」

b. met Bolo-die kel-de-ge iʒulbe-je  
 1単 [ボロ-指小 来る-3所-所格] 疲れる-1単  
 「私は、ボロが来たとき、疲れていた」

以上の例から見る限り、話者は定形節に不連続が認められる (b) のような例を許容する。このような不連続を示すテキスト資料中の例 (たとえば (19) のような) が必ずしも多く見られないという問題はあるが、規準 a に照らすならば、節連続

における非定形節は従属節である可能性が出てくる。以下では他の規準にも照らして、この可能性を確かめてみよう。

規準 b は、例文 (16) の示しているように、従属節だけが上位の動詞の前にも後にも来ることができる、という特徴を利用するものであった。この特徴を参照すると、ある非定形節が上位の動詞との位置関係において、前にも後にも現れることができるならば、その非定形節は従属節である可能性を示すことになる。

テキスト資料から引用した次の例を参照されたい：

- (23) a. əl+ qojl ann'ə-j ʃoromə tite, mət ann'ə-jə tit  
 否定+ 神 語る-3単 人 ~のように 1単 語る-1単 [2複  
 marqil', tit jumus'umu min-din erjə-t  
 娘 2複 白鳥 取る-目的分詞 ~したい-副動詞]  
 「神が人のように話していたんじゃない、私が話していたんだ、あなた達の娘、あなた達の白鳥が欲しくて」 [NK38-59]

- b. kökə-də-j-lə činej-l'əl-u-m ege-də-gə aj  
 頭-3所-所格-具格 切る-不確実法-△-3単 [出る-3所-所格 再び]  
 「(彼はそいつの) 頭を切り落としたのだ、それが (穴から) もう一度出ているときに」 [NK27-35]

以上の2例において、副動詞(例文 23a)ないし動名詞の所格形(例文 23b)を含む非定形節が定動詞の後に現れていることは明らかである。一方ここまでに観察した節連鎖の多くの例では——たとえば例文 (1), (9), (10), (11) など——非定形節は定動詞の前に現れていたことに注意されたい。以上の状況は、コリマ・ユカギール語の節連鎖において、非定形節が定動詞の前にも後にも置かれうることを意味する。これは Haspelmath (1995) の規準 b を満たす。したがって、この規準に照らしてもやはり、節連鎖における非定形節は従属節である可能性を

示す。

その可能性がかなり高いことは現地調査で話者から得られた次の例文を検討することによって明らかになるう。

- (24) Nikolaj-die      ʃko:la-nin   kebeč      mowo   mor-ie-t  
 ニコライ-指小   学校-向格   去る-3単   [帽子   かぶる-始発-副動詞]  
 「ニコライは学校に向かった、帽子をかぶりながら」

- (25) met   taŋ   paj   juo      anʃe   ajbi:   moro-dollo  
 1単   その   女   見る/1単   [目   陰   かける-副動詞]  
 「私はその女を見た、眼鏡をかけて」

- (26) met   iʒulbe-je   Bolo-die      kel-de-ge  
 1単   疲れる-1単   [ボロ-指小   来る-3所-所格]  
 「私は疲れていた、ボロが来たときに」

この3つの例文はそれぞれ、節連鎖(20a), (21a), (22a)の中の非定形節を後置して得られたものであるが、話者からはこれらがいずれも問題なく受け入れられるという判断が示された。以上の諸例から見る限り、規準bに照らしてもまた、節連鎖における非定形節は従属節である可能性が高いということになる。

3. 1で検討した他の2つの規準についてはどうだろうか。まずcの規準についてみる。この規準は代名詞の照応を問題にするものであって、ある節の(代名詞)主語が別の節に現れた主語と同一指示となる時、前者の属する節は後者の属する節に従属するというものであった。その状況を示す例文(17)と同様の例がコリマ・ユカギール語にも見られる。次の例を参照されたい：

- (27) aj tittə köde:-n qar-ŋin qon-dəlla terike:-de: n'as'-e:-j  
 [再び 3複所 狼-↑ 毛皮-向格 行く-副動詞] 妻-指小 祈る-始発-3単  
 「また彼らの狼の毛皮のところに行って、妻が祈りはじめた」 [NK38-33]

ここで定形節の主語 *terike:de*:「妻」は、非定形節の主語でもあると解釈される(現地調査の際のこの例文に関する話者の判断もこの解釈を支持する)。定形節の主語は実際には非定形節の後の位置に現れているのだから、ここで起こっているのは例文(17)と同様の逆行(ゼロ)代名詞化であり、これが可能な統語構造としては、非定形節が従属節であるような構造を考えるのが妥当であると思われる。

次の2例は現地調査で得られたものである。これらは、例文(27)と同様の状況がコリマ・ユカギール語において広く認められることを示していると思われる：

- (28) моро mor-ie-t Nikolaj-die ŋko:la-ŋin kebeč  
 [帽子 かぶる-始発-副動詞] ニコライ-指小 学校-向格 去る-3単  
 「帽子をかぶりながら、ニコライは学校に向かった」

- (29) aŋje aji: moro-dollo met taŋ paj juo  
 [目 陰 かける-副動詞] 1単 その 女 見る/1単  
 「眼鏡をかけて、私はその女を見た」

これらの例はそれぞれ、例文(20a), (21a)に対応するものである。上記の2例ではいずれも非定形節の主語は定形節のそれと同一指示であると解釈されるという話者の判断が得られた。また、両者に共通の主語は非定形節の直後に現れているので、ここに逆行(ゼロ)代名詞化が起こっていると分析することが可能である。このような状況を Haspelmath (1995) の規準 c に照らしてみるならば、(28), (29) のような例においてもまた、非定形節が従属節であるような統語構造

を想定するのが妥当であると思われる。

以上に 3. 1 節であげた 4 つの規準のうち規準 a から規準 c までを適用して、節連鎖の統語構造を検討してきた。その結果、節連鎖における非定形節が従属節である可能性がかなり高いことが明らかになってきたと思われる。一方、焦点を受けうるかどうかを従属節の判定の規準とする規準 d をコリマ・ユカギール語に適用するのはやや難しい。Comrie (1981:258-261) が概観するようにユカギール語が形態論的に精緻な焦点表示システムを有することは事実である<sup>(2)</sup>。けれどもここで問題なのは、その焦点表示システムによって形態論的に表示される焦点は主語・目的語・動詞に限られており、非定形節の焦点の有無をこのシステムで表示することはできないということである。また筆者の現在までに知る限り、例文 (18) のように非定形節に後置されて、非定形節全体を否定の焦点にするような単語ないし接語はコリマ・ユカギール語には存在しない。また非定形節全体を意味的に取り立てる「～すら」や「～さえ」というような単語ないし接語も存在しないように思われる。

以上のことから規準 d をコリマ・ユカギール語に直接適用することはできないけれども、それでも規準 d をいささかなりとも満たすように思われる現象は存在しないと言えなくもない。それは次のような例である；

(30) kin tet-in köl-de-ge tet mi:ǰi: a:-mik?

[誰 2単-向格 来る-3所-所格] 2単 櫓 作る-2単

「誰があなたのところに来たとき、あなたは櫓を作っていたのですか？」

(あるいは「あなたが櫓を作っていたのは、誰があなたのところに来たときですか？」)

(2) Comrie (1981) のユカギール語の概観はツンドラ・ユカギール語に基づくが、形態論的に精緻な焦点表示システムを有するという特徴はコリマ・ユカギール語についても同様である。ただし、コリマ・ユカギール語では動詞の焦点表示がツンドラ・ユカギール語ほど発達していない。

この例では非定形節が疑問詞 *kin* 「誰」を含んでいる。同様の状況は Maslova (forthcoming:584f.) でも報告されており、コリマ・ユカギール語で必ずしも稀だとはいえない。次の例文はテキスト資料からの例：

(31) *met uörpe qanjide kebej-t el'ejo:-ŋi?*

[1単 子供たち どこへ 去る-副動詞] 消える-3複

「私の子供たちはどこへ行ってしまったのか？」(Nikolaeva 1989:90)

以上の状況は言い換えれば、非定形節は疑問の焦点となりうる単語を含みうるということである。このことは非定形節が語用論的な焦点を受けうることを示してはいないだろうか。次の対話の例文は非定形節全体が新しい情報を表しうる状況を示す：

(32) a. *Nata:fa-die Xanin nigijelme kieč?*

ナターシャ-指小 いつ 昨日 来る/3単

「ナターシャは昨日いつ来ましたか？」

b. *met nume-ge modo-l-ge kieč*

[1単 家-所格 座る-動名-所格] 来る/3単

「私ที่บ้านにいたとき、来ました」

ここで (32b) における非定形節は (32a) の疑問 *Xanin* 「いつ」に対する答えを与えており、その意味で新しい情報である。この場合、「ナターシャが来た」ことが (32b) における前提となっていることを考えれば、非定形節全体が焦点となっていると解釈することは可能であろう。

以上の考察はやや間接的ながらも、非定形節が焦点を受けうることを示している。このことは Haspelmath (1995) の規準 *d* を満たすと考えられるので、この



点から見ても非定形節が従属節であると分析することは妥当ではないかと思われる。規準 d に関する考察がコリマ・ユカギール語の構造から来る一定の制約を受けていることは認めざるをえないが、少なくともその結果が規準 a から規準 c までを適用した考察の結果と概略一致することは明らかであり、また、非定形節を従属節であると分析することに積極的な反証を与えるものでないこともまた明らかであると思われる。

### 3.3 従属節としての非定形節

ここまでの議論を簡潔に振り返ってみるならば、Haspelmath (1995) の与えた 4 つの規準に照らして具体的に調べてみると、コリマ・ユカギール語の節連鎖における非定形節を従属節であると分析するのが妥当であるということになる。すなわちそのような非定形節は、(a) 上位の節の内部に現れることができ、(b) 上位の動詞の前にも後ろにも現れることができ、(c) 逆行代名詞化を許容し、(d) 焦点をうける可能性がある、という諸特徴を示す。これらの特徴を持つ節の統語的振る舞いを適切に記述するためには、節連鎖における非定形節を並列節よりはむしろ、従属節として分析したほうがよいと考えられる。以上の考察に基づけば、コリマ・ユカギール語の節連鎖の統語構造は、第 3 節の冒頭において提示した 2 つの構造 (3) と (4) のうち、階層構造を持つ (4) であると考えるのが適当である。その構造の概略を、議論の便宜のためにここでもう一度あげておく：

(4) [ [ [ (…) 非定形動詞 ] (…) 非定形動詞 ] (…) 定形動詞 ]

この構造は以上にあげた (a) から (d) までの統語的特徴を適切に説明する利点を持っている。その意味でコリマ・ユカギール語の節連鎖の記述にとって有用なものといってよいと思われる。

#### 4. 関連する諸問題の検討

この節では、以上で行った節連鎖の統語構造の記述に関連する2つの問題を論じることとする。4.1節では指示転換システムと節連鎖の統語構造の関連を論じる。また、4.2節では節連鎖の統語構造と意味との関係を論じる。

##### 4.1 指示転換と節連鎖の統語構造

Maslova (forthcoming:449-453)によれば、コリマ・ユカギール語の節連鎖においては、指示転換 (switch-reference) の存在が認められる。指示転換とは一般的に、先行する節の動詞に含まれるある種の標識が、それに後続する節の主語の変換を指示する現象である (cf. Haiman and Munro eds. 1983)。この場合、標識を含む側の節を表示節 (marked clause)、他方の節を制御節 (controlling clause) と呼ぶことにすると、コリマ・ユカギール語の基本的な指示転換規則は、筆者が遠藤 (2001b:128) で述べたように、以下のようになる：

(33) コリマ・ユカギール語の基本的な指示転換規則：

[A] 表示節と制御節の主語が同一であるならば、表示節の動詞には同主語の諸形式のうちの一つが選ばれる。

[B] 表示節と制御節の主語が異なるならば、表示節の動詞には異主語の諸形式のうちの一つが選ばれる。

具体的には、同主語の諸形式とは副動詞 (-t, -de, -delle など) のことであり、異主語の諸形式とは動名詞の所格形に基づく形式 (-l-ge, -de-ge など) のことである。<sup>(4)</sup>

ここで問題なのは、コリマ・ユカギール語の節連鎖において表示節と制御節

(3) この用語は Comrie (1983) に基づく。

(4) 指示転換システムに参加する諸形式 (異形態を含む) については遠藤 (2001b:127f.) を参照されたい。動名詞の所格形に基づく形式については、人称によって異なる4つの形 (12単, 12複, 3単, 3複) が区別されることが特徴的である。

をどのように規定すればよいのかということである。指示転換を扱った研究で(意識的にせよ無意識的にせよ)一般的に想定されているように、先行する節を表示節、直接後続する節を制御節と規定すれば確かにこの言語での大多数の例を扱うことはできる。しかし次の例が示すようにその扱いがうまくいかない場合もある<sup>(5)</sup>：

- (34) ta:t            Xodo-t            Xojl    lebie-d-emej-ŋin    örn'e-nu-l'el  
 それから    横たわる-副動詞    神    地-↑-母-向格    叫ぶ-継続-不確定法-3単  
 “met-ul        Xamie-ŋik”                    mon-u-t  
 [1 単-目的語    助ける-命令法 2 複    言う-△-副動詞]  
 「それから(彼女は)横たわって神の地の母に、『私を助けてください』と  
 言って、叫んでいた」

この例で、括弧で囲まれた非定形節は指示転換規則における表示節であるが、実際には制御節(この例文では定形節)に後続しており、先行してはいない。

Maslova (forthcoming) のこの問題の取り扱い、上記の(34)のような場合を特例として記述しておくというものであるように思われる。しかしながらいままでこの論文で行ってきた考察を基にするならば、この問題により一般的な解決を与えることも不可能ではない。それは、指示転換規則における表示節と制御節を次のような規約によって取り決めておくということである：

- (35) コリマ・ユカギール語の指示転換規則における表示節とは、制御節に統語構造上従属する節のことである。

第3節で論じたことが正しいとするならば、節連鎖における非定形節は統語構造上、従属節と記述するのが適当である。このとき、従属節である非定形節とそ

(5) Maslova (forthcoming 451-453) の指摘に基づく。

の上位の節（当該従属節が直接従属するような相手の節）との関係を、指示転換規則における表示節と制御節の関係と同一と見なすことができるならば、指示転換規則の記述を大幅に簡潔にすることができると思われる<sup>(6)</sup>。

なおこの場合、ある非定形節に対するその上位の節は、一般的には、それに直接後続する節であると仮定しておくのが妥当と思われる。そのような節が存在しない場合（つまり当該非定形節が節連続の最後尾に位置する場合）には、その節連鎖の定形節が上位の節であると仮定しておくのが妥当と思われる。この仮定の下では、節連続の中で指示転換が2回以上起こるような複雑な指示転換のケースもうまく説明できる。以下を参照されたい：

(36) a. met iʒulbe-lle čaj o:ʒe-t modo-l-ge  
 [[[ 1単 疲れる-副動詞] 茶 飲む-副動詞] 座る-動名詞-所格]

Bolo-die kel-u-l

ボロ-指小 来る-△-動名詞

「私が疲れて、茶を飲んでいると、ボロが来た」

b. tet čaj o:ʒe-t modo-l-ge Nikolaj-die

[[[ 2単 茶 飲む-副動詞] 座る-動名詞-所格] ニコライ-指小

kel-de-ge tet n'e+leme-die el+moʒe-k

来る-3 所-所格] 2単 否定+何-指小 否定+言う-否定法 2単

「君が茶を飲んでいたときにニコライが来ると、君は何も言わなかった」

話者の判断では、(36a) の場合、節連続での3番目の節の終わり、つまり Bolodie

(6) Finer (1985) の指示転換システムの理論的取り扱い、表示節が従属節であるという前提に基づいている。Roberts (1988) はこの前提への反論である。理論的にはこの論争にはまだ決着がついていないと言わなければならない。本論文はあくまでコリマ・ユカギール語という一言語における統語構造を論じたものであり、Finer (1985) の理論的枠組みを支持することを意図したものではない。

の前で主語の変転が起こる。この場合、グロスの中に与えた階層構造的な統語構造を仮定すると、3番目の節(modolge「座っていると」)が従属するのは4番目の節(定形節)である。すると(35)により、前者と後者は、指示転換システムにおいて表示節と指示節の関係に立つことになる。したがって(33)により、3番目の節の動詞に異主語の形式が現れることが予測される。これは(36a)のデータと合致する。より興味深いのは、節連続の中で指示転換が2回起こる(36b)の例である。話者の判断ではこの場合、節連続の中で2番目の節の終わり(Nikolajdieの前)と3番目の節の終わり(tetの前)において、主語の変転が起こる。グロスの中に与えた階層構造的な統語構造を仮定すると、(36a)の場合と同様に、指示転換システムでは、2番目の節と3番目の節の動詞に異主語の形式が現れることが予測される。これは(36b)のデータと一致する。注意すべきなのは後者の場合、このような階層構造を与えておかなければ、指示転換の形式の現れを正しく予測することが困難になるということである。仮に2番目の節が最後の節(定形節)に直接従属するような統語構造を与えたと仮定してみよう。その場合、両者の主語は同一(いずれもtet「君」)であるのだから、2番目の節の動詞には同主語の形式が予測されることになる。ところがこれは事実と反している。したがって最初の仮定に誤りがあると考えられる。つまり2番目の節が3番目の節に直接従属するような統語構造の方が適当なものであるということになるのである。

(4)のような階層的な統語構造は、(35)のような規約をおくことによって、コリマ・ユカギール語の指示転換を説明する際にも有効であることが、以上の議論から明らかになったと思われる。このことは我々の検討してきたような統語構造が適当であることを、文法の他の面からも確認するものであるように思われる。

#### 4.2 等位構造的現象の問題

(4)のような階層的な統語構造を節連鎖に仮定することのもう一つの問題は、このような構造と節連鎖の持つ意味をどのように両立させるかという点にあるように思われる。すでに第2節において我々は、コリマ・ユカギール語の節連

鎖が並列節に近い意味を持ちうるということを見た。すなわちそれは、(a) かなりの回数の非定形節の繰り返しを許容し、(b) 節同士の意味的関連が必ずしも明確でなく、(c) 定形動詞の法的意味が非定形動詞によって共有されうる、といった意味的特徴を示す。これらの意味的特徴と階層的な統語構造はどのように両立しうるのだろうか。

(a) についての問題は少ない。階層構造を作る統語規則を繰り返し適用すれば、非定形節の数は原則的には何個まででも増やすことができるからである。もっとも認知上の制約はあるようであり、テキスト資料からの経験的観察によるならばその数は、同主語を持つ節連鎖においては10個程度の節に、主語の変転が起こる場合には2・3回に限られるとみられる<sup>(7)</sup>。また(b)については、これらは基本的に節連鎖を作るのに用いられる副動詞ないし動名詞の所格形の意味・用法の問題に還元されると思われる。

(c) については2つの解決法が考えられる。一つはこのように法的意味の共有が起こりうる事実を重視して並列節的な構造の関与を認め、従属(subordination)と並列(coordination)の中間のカテゴリーであるcosubordinationと解釈することである。この解釈はHaspelmath(1995:23-27)がFoley and Van Valin(1984, Chapter 6)に基づいて、ニューギニアの諸言語の中間節(medial clause)を特徴づけた方法と同じである。もう一つはこのような新しいカテゴリーを創出することなく、コリマ・ユカギール語の副動詞ないし動名詞の所格形そのものに何らかの違いを見いだそうとすることである。前者の解決法がきわめて直裁であることは論を待たないが、cosubordinationという用語を一般言語学的に正確に規定できない限り、用語の濫造に陥る危険性もないとはいえない。ここでは残されたもう一つの解決法の可能性を探ってみたい。

法的意味の共有について興味深いことは、このような状況が主語を同じくす

(7) 非常に多くの場合、節連鎖の中では主語の変転は1回に限られる。このことは文の理解のし易さという要因に基づくのではないかと考えられるが、何らかの文法的制約がここにはたらいっていることも否定できないと思われる。

る(すなわち同主語の諸形式を含む)節連続に限られ、主語の変転を含む(すなわち異主語の諸形式を含む)節連続には見られないということである。たとえば法的意味の共有の例としてあげた例文(14)には主語の変転は含まれていないことが認められよう。筆者の調査では、テキスト資料中に主語の変転を含みかつ法的意味が共有されるような例は見いだされない。既に述べたように同主語の諸形式というのは副動詞のことを意味するのだから、法的意味の共有は実際には副動詞によってしかなされないことになる。

副動詞の形態論的構造は、異主語の形式である動名詞の所格形に基づく形式と比べて非常に単純であり、法の標識も人称の標識も含むことができない。一方、動名詞の所格形に基づく形式は人称の標識はもちろんのこと、-l'el-de-ge-ne「～であったなら(反実仮想)(3単)」のように一部の法の標識(この場合は不確実法の接尾辞 -l'el、ただし意味は多少異なる)さえも含みうる能力を持っている(cf. 遠藤 1997)。このことから、動名詞の所格形に基づく形式の作る非定形節はより独立性が高く(言い換えれば文に近く)、一方、副動詞の作る非定形節はより独立性が低い(言い換えればより動詞句に近い)とは想定できないであろうか。そのように想定した場合、独立性の低い非定形節が周囲の意味的な環境の影響を受けやすいのはむしろ当然であり、この点に法的意味の共有を許容する余地が存在するということが考えられるかもしれない。——ともあれ以上の想定は、同じ従属節とはいっても、従属の度合いが非定形動詞の種類によって微妙に異なるということの意味しており、これを確かめるためには、さらに多くの資料と詳細な考察が必要である。<sup>(8)</sup>

(8) 日本語の文法研究では、従属節によって主節に対する従属の度合いが異なるという指摘がすでにされており、「従属節の従属度」という視点が導入されている。この点に関して詳しくは、益岡・田窪(1989:189-192)を参照。

## 5. 結び

本論文ではコリマ・ユカギール語における節連鎖の統語構造について検討を進めてきた。その結果、次のことが明らかとなったと思われる。節連鎖はコリマ・ユカギール語の複文の主要なタイプの1つである。意味的側面からはそこに平坦な統語構造が予想されるけれども、いくつかの規準を適用して調べてみると、節連鎖の統語構造は実際には階層構造であると分析するのが適当である。このような階層構造を仮定することによって、節連鎖に見られる統語的振る舞いが適切に記述できるだけでなく、指示転換など文法の他の領域の現象の記述も簡潔になることが期待される。

節連鎖の研究は統語論研究の中ではかなり遅れて開始された分野であり、ようやく近年になって広く行われるようになってきた。そのような研究の中で、たとえば Roberts (1988) は、高地ニューギニアに話される Amele 語の節連鎖を検討し、この言語の節連鎖が並列節からなる平坦な構造を持つことを主張している。Robert (1988) の主張がもし正しいとすれば、節連鎖の中にもいくつかのタイプが認められるということになる。以上に記述を試みたコリマ・ユカギール語の節連鎖がさまざまな言語の中でどのようなタイプに属するのかも、今後興味深い問題を提供しようと思われる。

### 省略記号一覧

|                            |                             |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1, 2, 3 = 1 人称, 2 人称, 3 人称 | 単 = 単数 (たとえば, 1 単 = 1 人称単数) |
| 継続 = 継続アスペクト               | 複 = 複数 (たとえば, 3 複 = 3 人称複数) |
| 始発 = 始発アスペクト               | 所 = 所有 (3 所 = 3 人称所有)       |
| △ = 挿入母音                   | ↑ = つなぎ子音                   |



## 参考文献

- Comrie, Bernard (1981), *The Languages of the Soviet Union* (Cambridge University Press)
- (1983), “Switch-Reference in Huichol: a typological study”, In: Haiman and Munro (eds.), pp.17-37.
- 遠藤 史 (1997), 「ユカギール語コリマ方言の非定形動詞について」, 宮岡伯人・津曲敏郎 (編) 『環北太平洋の言語 第3号』, pp93-102. (京都大学大学院文学研究科)
- (Fubito Endo) (2001a), “Kolyma Yukaghir Text with Grammatical Analysis (3): The Children Who Left Their Mother”, *Keizai Riron (The Wakayama Economic Review)* 299, pp.1-10.
- (2001b), 「コリマ・ユカギール語における指示転換の現象について」, 津曲敏郎 (編) 『環北太平洋の言語 第7号』, pp.125-140. (大阪学院大学)
- Finer, Daniel L. (1985), *The Formal Grammar of Switch-Reference*. (Garland Publishing)
- Foley, William A. and Robert D. Van Valin (1984), *Functional Syntax and Universal Grammr*. (Cambridge University Press)
- Haiman, John and Pamela Munro (eds.), *Switch Reference and Universal Grammar* (John Benjamins Publishing Company)
- Haspelmath, Martin (1995), “The Converb as a Cross-linguistically Valid Category”, In: Martin Haspelmath and Ekkehard König (eds.), *Converbs in Cross-Linguistic Perspective*, pp.1-55. (Mouton de Gruyter)
- Jochelson, Waldemar (1927), “Essay on the Grammar of the Yukaghir Language”, *American Anthropologist* new series 7(2), pp.369-424.
- Kachru, Yamuna (1981), “On the Syntax, Semantics and Pragmatics of the Conjunctive Participle in Hindi-Urdu”, *Studies in the Linguistic Sciences* 11(2), pp.35-47.
- Keenan Edward L. (1985), “Relative Clauses”, In: Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description*, pp.141-170. (Cambridge University Press)
- 久野 暲 (1973), 『日本文法研究』 (大修館書店)
- Maslova, Elena (forthcoming), *A Grammar of Kolyma Yukaghir*.
- 益岡隆志・田窪行則 (1989), 『基礎日本語文法』. (くろしお出版)
- Nikolaeva, Irina (1997), *Yukaghir Texts*, Specimina Sibirica, Vol.13. (Savariae)
- Noonan, Michael (1985), “Complementation”, In: Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description*, pp.42-140. (Cambridge University Press)
- Payne, Thomas E. (1997) *Describing Morphosyntax*. (Cambridge University Press)
- Perevoščikov, Petr N. (1959), *Deepričastija i deepričastnye konstrukcii v udmurtskom jazyke* (Udmurtskoe knižnoe izdatel'stvo)
- Roberts, John R. (1988), “Amele Switch-Reference and the Theory of Grammar”, *Linguistic Inquiry* 19(1), pp.45-63.
- Thompson, Sandra A. and Robert E. Longacre (1985), “Adverbial Clauses”, In: Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description*, pp.171-234. (Cambridge University Press)